

従軍者の心理

毎年終戦日になると被爆者や空爆被害者が、戦争の悲惨や残忍性を自己体験から語部となり、平和を訴える姿がマスコミに取り上げられる。戦争の被害体験者が高齢化し戦争が風化しつつある事を考えると尊い事である。

金戸の戦争体験を聞きながら気付いたことであるが、被害者としての戦争体験は語られるが、加害者としての体験は語られないことだ。或る人は捕虜を捕まえ明日には穴に埋めた、初年兵の肝試し上官の命令で刺し殺したが罪悪うんぬんの感情は希薄だったとか、また戦地での事は話すまいと語り合ったなどに複雑な加害者心理が秘められているようだ。

戦後世代は戦争というテーマは実感のない観念的なものであり、時として平和ボケするほどの「安全地帯」から「戦前・戦中の天皇・軍隊はけしからん。戦争反対」と叫ぶ虫の良すぎる平和論者を装う疚しさを感じつつも、加害者としての体験を語れないという異常時の戦争の恐ろしさを覚える。

殺人という加害者体験のトラウマがいかにか大きいか思い知る話がある。その人はよく法事で遇う住職だが、自分の経験や敵に殺された戦友についてよどみなく話された。私が彼自身の殺人体験について質問すると「戦場ではだれを殺したかはつきりわかるものではない」と言われた。しかし下士官であった彼の住職は、重い口で「でも一度だけ模範を示すために日本刀で捕虜を打ち首にしたことがある」と語られた。すすり泣きに声を詰まらせ顔は苦しげにゆがんでいた。いまも時折ふつと思ひ出すと言われた。後日、彼は「金戸さんよ、あんたは若いし、戦争の体験もないし、理想の世界を語っているが、あなたの質問は人を傷つけるし、いまでもすごく苦しんでいる者がいるから。気をつけねばならないよ」と言われた。親切で穏やかな人の心に恐ろしい傷を負っているのを初めて知った。

本質に関わるものがあるのだ。日本の歴史上で国体を変革するチャンスが三回あったと云われる。一回目は室町三代將軍の足利義満の時、二番目は戦国期の織田信長の時、三番目は第二次世界大戦後の時だ。ある従軍の方は「天皇陛下万歳と言って死んで行った者は一人もいないと、多くはお母さんと言うか、妻や子供の名前である」と言われた。私は「それだけ悲惨な目を負わせた天皇制を、復員後に廃止運動しようと思わなかったのは何故ですか」と、先例に懲りず亦も誠に不躰な質問をした。

それに対して「不思議なことになんか逆一切思わなかった。逆に国体が残って良かったと思つた。国破れて山河ありだ」と語つた事に驚いた。いのちを賭けて家族とふるさとを護るといふ使命を果たした自負心を感じた。戦後生まれの命を賭けたことのない者には、不幸を社会の性ばかりにしている現代人には理解し難いものがある。



杉本外次郎の千人針

従軍者と戦没者

太平洋戦争

日露戦役

陸歩補 勲八 源元伊蔵明 38 3 7 桃家屯

陸曹勲八 江久吉 (金糸勲章) 工兵
陸歩軍 嶋嶋外光 (東頭志願兵 18歳)
竹山定次郎

品川政吉
海軍 盛田清秀 (志願兵 16歳)
名簿以外の者
関堂清次 (森井の分家)

太平洋戦争

陸歩伍

北山清一 工兵第九連隊

松田伊三郎 シベリア抑留

陸伍 高桑慶輝 17 4 30 河北省

嶋嶋俊雄

朝日八左エ門

陸長 中仙道政夫 19 2 17 太平洋上

江徳太郎

神本正年 満州

陸長 宮塚豊治 20 5 10 沖縄

石橋太三

江 豊吉

陸長 森井外二 19 7 27 ビルマ

陸輜長

森井繁正

梅本孝一 インパール作戦

陸上 東頭幸一郎 20 7 17 比島

盛田正一

盛田豊之助 シベリア抑留

陸上 盛田正吉 20 4 8 満州

杉本利

山本忠一 満州

陸歩一 北山義雄 16 7 25 本籍地

北山経信

品川正吉 工兵

東頭時光 20 6 10 日支事変戦後病死

海水長

江徳太郎
森井茂 (信一の弟志願兵)

杉本与四郎
朝日光信 志願兵
高桑慶雄 トラツク島

従軍兵

日露戦争

陸歩伍 高倉太八郎

陸憲上

山本慶一

陸歩上 東頭亥之助

陸一

盛田竹一

陸歩一 盛田弥佐

陸一

梅本勝二 (孝一の兄)

陸輜卒 梅本五左

竹山豊忠

陸輜卒 山本太左

宮塚久一

松田宗一郎

陸飛上

神本友一

近衛兵

朝日久太郎

梅本友一

上海事変

中川宏

陸歩上 片桐金蔵

森井信一

陸輜卒 中仙道常次郎

松田一良

盛田喜寿
杉本外次郎

戦記を終えて

戦記を書く前は、戦時中の青年が「戦争に行くことが、男の本懐だ」というのは偽りと思っていたが、村人の従軍記・日記・復員者の話を聞くに多くは真剣であった。戦争に反対して獄中に全うした事になるが、一方でその人はふる里を護ろうと生命を落とした多くの戦死者に責任はないのであろうか。被害者体験は歴史の教訓であるが、加害者心理は人間本質が持つ深遠な罪障性に関わる問題であった。